

十
蘭
占



中山智幸



純然たる文系人間なのに理系の話題に惹かれる、という人は多いと思う。僕もその口で、前菜である基礎知識は飛ばし、メインディッシュにがっついてしまう。

「超ひも理論」を知ったときもそうだった。専門書まで買い求め、貪るように読んだ。なのに今、具体的な話は殆ど忘れている。覚えているのは、想像の顕微鏡で極限まで拡大していくと世界を構成する最小の要素は「ひも」だ、という程度。闇雲に頼張った知識が根付かないのは当然だけれど、苦手な相手に悪辣な嫌味をぶつけられたときに「突き詰めればこの人も『ひも』なんだよな」と思えば気がラクになる、という処世術を身につけたのはひとつの収穫だ。

時間旅行についての本も読んだ。タイムマシンが不可能であることの説明は幾通りもあり、なかでも僕が納得したのは「地球が宇宙の一点に留まっているわけじゃない」という事実。太陽も銀河も一カ所に固定されているわけじゃなく、ビッグバンが正論ならみんな大急ぎで中心から離れていっている。だとすれば、一年前に戻ることが可能だとしても、その時刻に地球が宇宙のどこにいたか、正確な一点を指すには宇宙全体の把握が必須で、タイムマシンは出発前に座礁してしまう。この説明から僕は、どの一瞬も「またとない」ことを再確認し、宇宙規模で見直すことで地上での一日がより貴重に感じられるようになった。いたずらに「今を生きろ」とか諭されるより、ずっと。

世界はひもでできている。地球は二度と再び同じコースを辿らない。それら理論に含まれる科学的恩恵は莫大だろうけれど、僕にはそのものを呑み込むしかできない。調理法や産地、栄養分も関係なく、血肉になるか否かも不安定だけれど、理系文系問わず世は驚きで溢れているのだから、雑食くらいでちょうどいいのかもしれない。

ちなみに、時間旅行は可能だと信じている。なぜかの説明は理系の同志に譲りたい。



僕の場合、酒より式典より、選挙で「成人」を実感した。初めての一票を投じる時に考えたのは、僕にとってのレモン汁は何か、ということだった。

話は未成年時代に遡る。大学の夏休みで帰省中のある日、出口調査のバイト話が舞い込んできた。投票会場である小学校の前に二人一組で立ち、一時間ごとに決まった数だけサンプルを採る。簡単そうな割に日当が弾んでいたが、担当場所が遠く、原付きで一時間近い距離なのは困った。山間の小学校前に着くと、パートナーとなる同い年の男が先に来ていた。背が高く細身で、暑さもあってかぼんやりした顔つき。クリップボードを手に僕らは仕事に掛かった。周囲に民家は少なく畑ばかりなのに、人は途切れない。調査は一人一分とかからず、僕らは大半を日陰で涼んだ。午前の分を終えると、パートナーが「うちでメシ食わんね」と誘ってきた。彼はすぐ近くの住人だった。

曾祖父の代から住んでいるという古い家屋に招かれ、おじゃまします、と告げると、「みんな畑出とる」と返された。軋む廊下を進み、食堂に通された。脚の細いテーブルには醤油とウスターソースとレモン果汁が置かれていた。レモン汁なんて使ったこともなければ売ってあることすら僕は知らず、使い途は唐揚げと紅茶しか浮かばなかった。自分の昼食は用意していたので、彼がラーメンを作る様子を眺めていた。完成した豚骨ラーメンに彼はレモン汁を盛大にかけた。驚くと同時に、この家でレモン汁は必需品なのだと理解した。

午後の調査を僕は熱心にこなした。協力してくれる人の普段の暮らしを覗くように、この人の必需品は何だろうと考えた。労を厭わず選挙に来る理由のひとつは、その日常を守るためなのだろう。

その晩の選挙速報の、当選者、落選者、双方を支える数字が校門前で接した人々を思い出させた。それが僕にとって政治を意識する原体験となった。

03 母の輪郭



英国人の教授に論文の書き方を教わった際、強調されたのは「結論を冒頭に置くこと」だった。日本人は結論を最後に配置する傾向があり、読む側の興味を持続させにくい。冒頭に述べた結論は読み手に疑問となり、答えを知りたい思いが読む推進力となる。故に結論は冒頭に。

というわけで僕は、母に謝りたい。

僕が中学生になった頃から、母は講演会の類に出掛けるようになった。芸能人、学者、登山家、音楽家。語り手は都度入れ替わり、催眠術でもかけられたみたいに母は決まって感銘を携え帰宅した。うちは共働きで、母も昼は外の世界で生きてるのだから刺激は多いはずなのに、どうしてわざわざ無縁の他人の言葉を聴きに行くのか。僕には理解できなかった。それ以上に釈然としなかったのは、聴いた話をそのまま僕らに披露することだった。誰某がこんなことを言っていた、とさも嬉しそうに。受け売りを耳にするたび僕は、「で、母さんの考えは何なのさ」と思った。多分、実際にそう言って責めたこともある。十代にも馴れてきた僕の世界は可塑性に富み、悲喜こもごものひとつひとつが新しい考えを、さも自分だけの思いつきのように授けてくれた。そして僕は「母には自分の考えが無い、あってもひどく薄いものだ」と決めつけた。

今、三十代も半ばに差し掛かり、自分の考えや経験だけでは狭すぎて突破口どころか針の穴さえ見つけられない状況も多く、無縁の他人の言葉に救われることも少くない。若い人の悩みに借り物の言葉で応じることもあり、そんなときには十代の自分が背後から睨んでるのを感じる。振り返って僕は問いたい。母が教えてくれた幾人もの言葉、考え方、それらから母という人をもっと深く知ることだってできたんじゃないか？

フォードの創業者ヘンリー・フォードはこう言っている。「できる、と思うか、無理だ、と思うか。いずれにせよあなたは正しい」

04 うまれでくるたて



誰それに生まれ変わりたい、という愚痴をたまに耳にする。花や猫、千の風とかなら気にならないが、特定の人物、それも存命中の人名を挙げられると、どのタイミングで生まれ変わりたいのかが大問題になる。

たとえば誰かが「ブラッド・ピットに生まれ変わりたい」と言ったとして、遙か未来でブラピの容姿、人格、才能を持って生まれたいのか、はたまた過去にさかのぼって今まさに生きているブラピとしての人生をイチから歩みたいのか。仮に前者だとして、別の時代で現代のブラピと同等の人生が保証されるわけでもない。ならばやはり後者か。しかし来世なのに過去というのは辻褃があわないじゃないか。

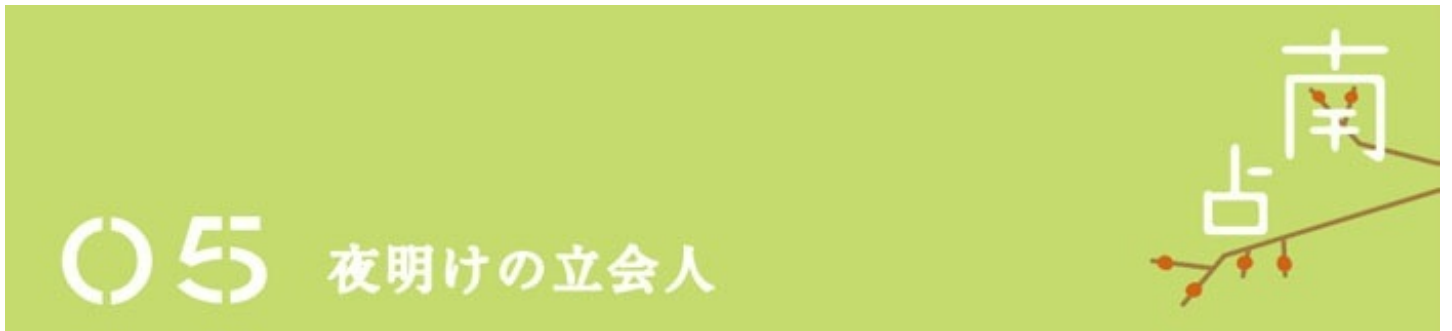
ちょっとしたつぶやきにこうまで食いつかれたら発言者も困るだろうから、実際には詰問したりしない。

僕自身は今のところ転生について願望はない。信じないとかではないし、興味はある。数年前に中国政府がチベットの高僧に向け「転生するなら事前に申請するように」とお達しを出したけれど、必要とあらば僕も一応の申請は出しておきたい。備考欄があれば、「誰に」ではなく「どんなふうに」生まれたいかは書くかもしれない。

以前から宮沢賢治の「永訣の朝」が好きで、高校の教科書にも収録されていたのだけれど、時間の都合で危うく飛ばされそうになったときには国語教師に頼み込んで授業で採り上げてもらったほどだ。

(うまれでくるたて　こんどはこたにわりやのごとばかりで　くるしまなあよにうまれてくる)

このくだりが、なにより強く、好きだった。考えてみれば今のこの生だって、誰かの、何かの生まれ変わりかもしれない、ならば来世を願うより今生を理想のものへ変えることが先で、来世の課題なんて自分が果てるときにようやく見えてくるものかもしれない。また自分として生まれたい、と思えたなら最高に幸せだ。それが今日を頑張る理由にもなりはしないだろうか。



出産に立ち会うことは前から決めていた。東京から大分へ、陣痛の報せを受けて飛行機に乗るのでは間に合わないかもしれない。その覚悟はしていたが、あんな展開になるとは思いもなかった。

昨年十月初旬、連絡を貰い飛行機に乗った。雨の中、午後六時に到着。間に合うどころか、それから十二時間、長い夜を過ごした。陣痛が来るたび妻の背中をさすった。妊婦さんが一人、また一人と分娩室へ入っていく。台風之夜は出産ラッシュになるのだという。ビデオカメラ片手に分娩室へ入る手術着姿の男性を見かけ、少し未来を想像した。妻の手を握り、応援する。そこから長くかかるだろう。なにしろ初産だ。

午前六時過ぎ。遂に妻も分娩室へ入った。僕も続こうとしたら「旦那さんは廊下で」とドアを閉められた。呆然としていると看護師が手術着を持ってきて、こう言った。「今、LLしかなくて、これ着て待っててね」彼女は足早に去り、僕は廊下で濃緑色の服を着た。見事にだぶだぶ。笑ってくれる相手もおらず、デジカメで自分を撮った。余計に空しくなる。

さらに三十分ほど待たせようか。分娩室の扉が開き「旦那さん！」と呼ばれた。「もう産まれるから！」驚く間もなく妻の横に立つ。先刻の比ではない妻の苦しみように無力さを痛感する僕に、看護師長が言葉をかけてきた。

「旦那さん、あの人に似てるね、チャミスルなんとかって言う韓国の」

「あの人ですよ、ほら！」と若い看護師が記憶を探りはじめ、まさかの談笑が始まった。チャン・ドンゴンですか？ と言うべきか悩んだが、そんなことをすれば一生の不覚。妻や子どもにどう思われるか。「チャン・ドンゴン！」と誰かが答えてくれてほっとしたのも束の間、直後に初めての子が産まれた。小さな、小さな、女の子だった。みんなが笑うなか、ようやく、僕も笑った。娘だけが泣いていた。



「ダイイング・メッセージ」といえばミステリー作品等で被害者がいまわの際に遺すヒントを指すけれど、僕の父方の祖父が遺したメッセージは「106・8歳」だった。とはいえ祖父は病院で穏やかに息を引き取ったし、そこに事件性は皆無。ただ、死の数日前に看護師から「おいくつですか」と質問されたとき、はっきりと答えたそうなのだ。「106・8歳」と。

鹿児島、山奥の火葬場で僕は姉からその話を聞かされた。祖父の享年は90にも達していなかった。「106はまだしも、テン、ハチって」と僕は笑った。祖父の酒好きを口実に従兄弟連中で通夜を飲み明かして、気分もまだ高揚していた。悲しみの少ない別れだった。

「死んだのが6月8日だけん、それば予言したとかもよ」と姉は推理した。なるほど、と納得しかけたものの、揚げ足取りが得意な僕は「じゃあ『100』はなんだって話じゃん」と返した。

燃え尽きるまでのあいだ、僕は火葬場周辺をひとりで散歩した。「100」の正体が見つからないかと足下を探し、背伸びして錦江湾を覗いた。唐湊の墓地へ移動してからも、親戚の家で再び酒盛りの夜を迎えてからも、東京へ戻ってからも、僕は探った。答えはどこにも見つからず、謎はのっぺらぼうのまま、じっとこちらを見るばかり。やがて、振り出しから辿り直そうと決心して、祖父の死から始まる短い小説を書いた。そいつを何度も書き直した。

小説の新人賞を獲ったとき、受賞の言葉に「ふたりの祖父について、いつか書きたい」と僕は記した。母方の祖父についてはまた別の理由があり、父方の祖父については前述の出来事がきっかけにある。どちらも未だ果たせてないが、忘れてもいない。

「ダイイング・メッセージ」は和製英語だそうで、直訳すれば「死にゆく伝言」となるだろうか。僕は祖父の「106・8歳」を、このまま死なせたくはない。



悩ましい、という言葉がある。

選択を迫られたときに使うケースと、色気に惑わされるときに使うケースとがあるが、僕にはなぜか後者の印象のほうが圧倒的に強い。おかげで、重要な打ち合わせの席で誰かが「悩ましい」と言おうものなら、僕の脳裏にはふたりの峰不二子がラウンドガールよろしく選択肢の書かれたボードを掲げて歩き出す。衣装については触れないが、ほんとに困る。頭で理解していても、避けては通れない。僕はこれを「ふ〜じこちゃ〜んの呪い」と名付けている。

この手の現象は枚挙に暇が無く、「髪を梳かす前にブラシを3回振らなければ失恋する」なんて迷信を結婚後も遵守してしまうことだって一例だ。くだらないが、誰にだって「呪い」のひとつやふたつあるだろう。自分の行動をあらためて観察すれば、大半が習慣から成り立っていることに気づかされるし、習慣の変更が容易でないのはダイエットや禁煙の情報が尽きないことから明らかだ。

では、「呪い」が悪いことかといえば、案外そんなこともない。おとぎ話にあるように、魔法使いの呪いを解くことはときに生きる意味となり、克服の暁には幸福が待っていたりする。現実の世界でも逆境に落ち込んだ人ほど、その先での跳躍はすごい。新年度を憂鬱な気持ちで迎える人もいるだろうが、呪いは破るためにあるのだと僕は思う。

とはいったものの、どうすれば「不二子ちゃんの呪い」は解けるだろう。確実な方法は、人々が「悩ましい」を「選べない」の意味では使わないようにしてしまうこと。「色っぽい」に限定するわけだ。そんなの無理だよ、とあなたは笑うかもしれない。しかし、あなたが次に「悩ましい」という言葉に接したときに峰不二子を想像してしまう可能性は低くないだろうし、僕と同じ呪いにかかってしまえば、決断を迫られる場面でも「悩ましい」とは言いにくくなるだろう。まずはそこからだ。

ご協力感謝します。



母の旧姓は「米田」と書いて「めた」と読むが、同姓の人に会ったことはない。祖父母は健在で、今も垂水に暮らしている。僕も幼少時には夏休み、冬休みを垂水で過ごした。桜島は頻繁に噴火し、灰が降った後には地面に絵を描いて遊んだりした。祖父は、ひどく怖い人だった。

十代で南満州鉄道株式会社に就職した祖父は、ハルピンに配属された。素肌で鉄に触れたなら皮膚が張りついてしまう極寒の地で、ドアノブはもちろん、柱の釘一本に至るまで布の覆いが施されていた。戦争が始まり、彼の地で兵となった祖父はロシア国境近くへと派遣され、後に宮古島へ南下した。いちばん寒いところからいちばん暑いところへ移ったのだと祖父は語った。

僕が子どものころ、祖父はとにかく厳格で、映画で観た日本兵のイメージそのままだった。それもいつしか丸くなり、こちらの成長も手伝ってか、以前のような怯えを持つことなく話せるようになった。戦時中の体験について僕が積極的に聞きたがるようになったのもここ数年のことだ。最初は単純な興味だったが、断片的な話を自分なりに咀嚼していくうちにもっと知りたいと思い始め、やがて、祖父の話を残したいと考えるようになった。物語の形で。

今、手元にひとつのファイルがある。二〇〇七年一月に垂水を訪ねたときの記録だ。極寒から酷暑への旅もそのときに聞いた。あの時代についての証言。いつか、いつか、と繰り返しながら構想を練るものの、未だ形を成していない物語の源泉。

その日、最も印象深かったのは、生真面目な祖父が兵となり死を覚悟したときに抱いた後悔の念だった。

「もっと好きなようにやっておくべきだった」

その一言で、僕は祖父にようやく近づけた気がした。

母は三人姉妹で、全員が他家に嫁いでいる。姓は途絶えるかもしれないが、あとを継ぐものがないわけではない。



もともと刺身を食べないので、自然、寿司を食べる機会も少ない。なのにときどき、無性に回転寿司に行きたくなる。実際に足を運んだところで頼むネタは固定されていて、海老、いなり寿司、納豆巻き、芽ネギあたりをつまめば胃袋は落ち着く。ときにはサイドメニューの天ぷらやデザート注文し、目の前でおいしそうにまともなお寿司を堪能する妻を眺めながら、いっしょに味わってる気分を満喫する。

なぜ回転寿司に行きたがるのか自分でも疑問だったけれど、先日、ふと気がついた。回転している状況が好きなのだ。

実際、たまに店へ行ったとき僕がまず気に掛けるのは「回転している状況」で、確かめるとほっとする。回転寿司のコマーシャルを見かけたときにも、流れている寿司ではなくベルトコンベアがせっせと稼働している様に意識が向く。

富士山についても似たようなことが言える。僕が普段利用している電車から、天候次第で富士山を拝むことができる。そう頻繁にはではなく、運がよければ、といった程度の確率で、見えた日には「今日もあった」と安堵する。あるのが当然と知っていてなお、その姿を焼き付けようとする。でも、寿司と同じく普段はまるで無関心だ。

寿司も富士山も話としてはくだらないものかもしれないが、日常において「よかった！ ちゃんとあった！」という安心を抱く場面は案外多い。その反対「しまった！ もうない！」の局面は、それ以上に多い。生々流転、諸行無常。

今日のこの紙面上にも、それに類する記事を見つけることができるだろう。環境問題。訃報。株価。政府の翻心。目を光らせていないと事態は呆気なくそっぽを向いてしまう。どれだけ注視していても、変わるときは変わる。

ある日突然、寿司がぴたりと動かなくなったとして、僕にそれを嘆く権利は無いだろう。無関心とは、とりもなおさず、そういうことだ。



もともと僕は一目惚れタイプで、何かを好きになるときは第一印象で決定される場合が多い。恋愛においてのみならず、たとえば洋服を物色しているときにも初見でズドンと来たものを買うし、一度好きになってしまえばボロボロになるまで徹底的に着込む。

食べ物に対しても同じで、特にコンビニで恋に落ちることが多い。コンビニに並ぶお菓子やおにぎり、飲料水は、ほとんど毎日新商品が出陣してきているのではと思うほど入れ替わりが激しく、当たり外れはあるものの、運命的なおいしさと出会う幸運だって皆無ではないので、自分の好きそうなものには積極的に手を出していた。あるところでそれをパタリとやめたのは、新商品の猛攻勢についていけないから、ではなく、好きなものを見つけてしまうのが怖くなったから。

どれだけ好きな味を見つけても、昨今はどれも短命で、まず間違いなく姿を消す。短い逢瀬を楽しめばいいのかもしれないが、僕の場合惚れ込んでしまうから始末が悪い。ぞっこんになった相手が次から次へと転校していくようなものだ。そんな理不尽な失恋を重ねていたら、恋愛そのものに臆病になって当然だろう。

いったい、新商品から定番商品へ昇格する確率はどの程度のものだろう？ 棚上の変遷から推測するに、ひどく低いに違いない。新しいものが出ても消え、出ても消え。世の潮流とわかっているし、開発側こそ大変だとも思うのだが、こちらも割に疲れてしまう。

近頃は、自動ドアの向こうで待ちかまえる新作たちを思うとそれだけでいささかの気後れを感じるので、消える心配のない梅干しおにぎりやグレープフルーツジュースあたりをピックアップしてレジへ急ぐことにしている。僕にできる、ささやかな抵抗だ。

それでもときどき、視界に飛び込んでくる商品がある。あたかも美貌の転校生みたいに。そこはもう惚れた弱みと諦めて、連れて帰るしかないわけだけど。

後続ランナーの特権



先日、姉が誕生日を迎えた。僕より二つ上。同じ高校で同じ部に属していたこともあり、周囲からは仲良しに見られていたかもしれないが実際は喧嘩が絶えず、僕が腕力で勝るようになるまでは肉弾戦も辞さない間柄だった。姉にしてみれば年上というだけで責任を負わされ、反対に年下というだけで庇護される僕に憤慨するのは当然だったろう。僕は僕で、姉が常に先を走っていることに苛立ちを覚えていた。

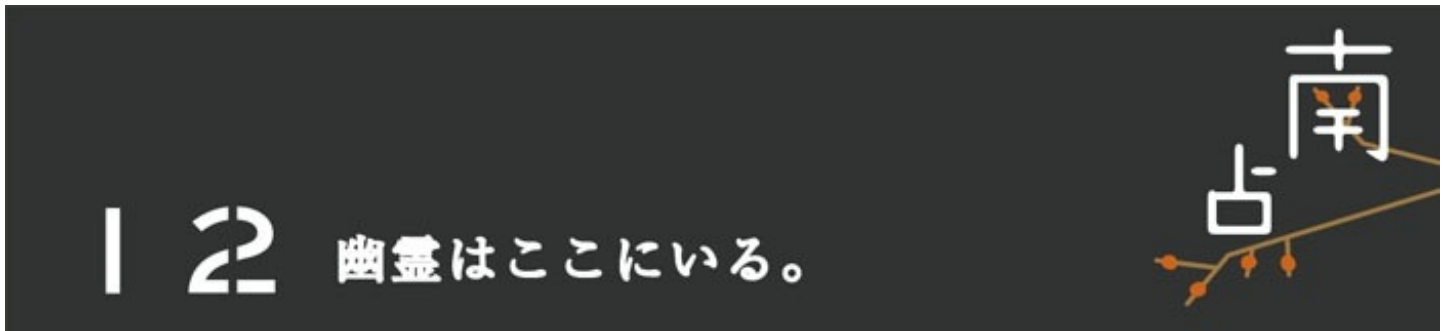
さすがにもう喧嘩はしないし苛立ちも無いが、あとを追う感覚は今も根強く残っている。

人生が障害物競走だとして、先行ランナーの姉を観察することで、経験の少ない僕は先に待つ障害を予測し、ときに要領よく立ち回ることもできた。それは年下の特権で、弟・妹を持つ人々が口を揃えるように、「年下はずるい」ものだ。勉強のこと、友人のこと、教師のこと、恋愛のことを、僕は姉から予習した。一方でそれをつまらないと感じることもあった。姉を通して二年先を生きているようで、新鮮味が欠く出来事も少なくなかったからだ。

姉の成功と失敗から近道や抜け道まで学べたのは良かったが、それもある歳までのこと。この競技において障害物が毎度違った形で現れるのは把握していても、その差が広がっていくとは知らなかった。仕事、結婚、子どもの問題。姉の背中に抜け道を見つけることはもうできない。

実を言えば、どこかで姉を追い抜くつもりでいたが、それもまた幼く浅はかな考えだった。なぜなら僕は既に後続ランナーじゃない。部下がいて、娘が生まれ、三十代も半ばだ。振り返れば先行ランナーになっている自分を発見する。うまく立ち回ろうと失態を演じようと後続者たちには同じだが、できれば上手に乗り越えてみせたい。だから僕は五月が巡ってくるたび、二年先を見る。待ちかまえる障害がなんであれ「乗り越えられる」ものであることを教えてもらい、自らの糧とするために。

幽霊はここにいる。



幽霊についての話をしよう。と言っても怪談の類ではなく。

二十四歳のとき、新聞の短い記事で知人の死を知った。阿蘇の山道でバイクに乗っているとき、自動車との衝突で彼は亡くなっていた。大学で同じクラスで、さほど親しくはなかったが、それからの数日というもの、折に触れ彼を思い出した。のっそりした風貌。穏やかな口調。不器用な笑顔。ディテールが増すほど存在感は強まっていった。これは古典的な幽霊の在り方だ。乱暴に言えば脳が見せる幻覚、「記憶」の別名とも呼べる。自分が生きている限り、この手の幽霊は身近な人物の死を通じて数を増やしていきたくらうし、誰しも覚えのあることだと思う。

もうひとつ、従来とは違った在り方について。

ネットで調べ物をしていると、あるブログに行き着いた。筆者の人柄が滲み出るような文章に惹かれて、当初の目的はそっちのけに古いものから時系列に沿って記事を読んでいった。ようやく最新ページに来ると、筆者の弟を名乗る人物がこんな文章を書いていた。

「先日、兄が亡くなりました。このブログを書くこと、そしてそれを読んでいただけることを励みにして、長い闘病生活の最後の数年間を幸せに送ることができました。本当にありがとうございます」

最新記事の日付もずいぶん古いもので、読み終えたとき僕は、今まで向き合っていた人物が幽霊だったかのような困惑に見舞われた。考えてみれば、現実の知り合いと違ってディスプレイ越しの知人が存命であるとは限らないわけで、パソコンや携帯で目にしている人物の幾らかは既に幽霊なのかもしれず、ネット上の情報が蓄積されていくものならば、死者の割合は増加の一途を辿るわけだ。

裏を返せば、ネットに写真や文章をアップロードする行為は幽霊を生産することでもある。そう、自分自身の幽霊を。

13 仮の挨拶



始まりがあって、終わりがある。そんな物語を初めて書いたのは中学二年生のとき、学校で、原稿用紙二枚分ほどを一息に、友人の机にシャーペンで綴った。自分の席に戻ってきた友人がそれに気づいて読み進めるのを、僕は遠目に観察した。

なぜそんな大胆な行為に出たのか、今も不思議でならない。物語を考えることは僕の日常だったが、誰かに読ませるなど想像しただけで燃え出しそうなくらい恥ずかしく、家族にさえ秘密にしていたのだから。

二〇〇五年の春、文芸誌の新人賞で最終候補に残った際も、妻しかそれを知らなかった。受賞すれば実家には伝える気だったが、結果は落選。その数日後、父が出張で上京したときに半ば開き直って、小説を書いていること、最終で落ちたことを打ち明けた。すると父は嬉しげな表情で「そうか、書いてたのか」と言い、こんな話を聞かせてくれた。

僕が生まれたころ、父は毎日バスで片道一時間をかけ通勤していた。ある日、乗客たちを眺めながら「この人たちの生活を小説に書いてみたい」と思ったそう。お世辞にも父は文章が巧くはないし、小説を書くイメージもまるでない。実際に書いたのか、構想はどんなものだったのか、詳しいことは何も聞かなかった。ただ、四月の初め、おだやかに明るい部屋の中、父が、なにか大切なものが帰ってきたように僕の失敗を受け止めてくれた、それで充分だった。

以来、僕は父の話を時折思い返しては、自分が小説を書くルーツをそこに見出し、同時に、父を含むバスの乗客たちの物語が今も続いていることに気づかされる。そしてこう考える。始まりも終わりも無いのだと。あるとすれば、始まりは僕の生まれる遥か前に存在し、終わりは僕の死のずっと後に訪れるのだろう。それ以外はすべて仮置きのものにすぎない。

ゆえに、これもひとまずの結びということになる。半年間、ありがとうございました。またいずれ。